

新人保育士が感じる保育の難しさとは何か — 3歳未満児クラスにおける検討 —

入江慶太

What is the Difficulty in the Childcare that a New Face Nursery Nurse Feels? — Examination in Under-Three-Year-Old Classes —

Keita IRIE

キーワード：新人保育士，保育の難しさ，3歳未満児クラス

概 要

本研究では、3歳未満児クラスに所属する新人保育士が保育を行う上で感じる保育の難しさに焦点を当て、その具体的な様相を描き出すことを目的とした。

8名の新人保育士にインタビューを行い、質的分析を行った結果、3歳未満児クラスの新人保育士が感じる保育の難しさは、子どもに対する生活支援方法の幅のなさなどに関する「子どもへの支援」の難しさ、保護者への声かけなどに関する「保護者への対応」の難しさ、保育士間における保育観の違いなどに関する「保育士間の連携」の難しさの3つに分類することができた。また、これらのカテゴリに共通する難しさは、新人保育士のコミュニケーション能力に帰結するものが多いことが明らかとなった。

今後の課題として、3歳以上児クラスの新人保育士が感じる保育の難しさの検証と本研究との比較や、保育の難しさの変容を明らかにするために新人保育士を対象とした1年間の縦断的研究を行う必要性が示唆された。

1. 緒 言

平成20年度に告示された保育所保育指針¹⁾では、保育士の専門性として、保育の専門的知識・技術とともに「判断」する力が強調されている。そもそも保育実践は、園やクラス、子ども、保育士などが持つ多くの要素が絡まりあった結果、同じメンバーで同じ方法を取ったとしても、昨日の実践と今日の実践は大きく異なるという性質を持っている。つまり、保育実践は「その場・その時」で適切な「判断」を行うことが前提とされている営みだと言い換えることができる。その「判断」を行うためには、現実の実践を積み重ねることにより身に付いた実践知が必要である。

乳幼児教育の現場における実践知研究の対象は、一定の保育実践経験を積んだ保育士や幼稚園教諭であることが多く^{2,3)}、保育の専門家としてスタートを切る新

人保育士がどのように実践知を形成し始めるのか、そこに着目した研究は存在しない。なぜなら、実践知はある特定の経験を一度すれば形成されるものではなく、その経験が熟成するための繰り返しの経験と一定の時間が必要となるものだからである。しかし、保育士となって保育現場に臨む1年目が、これから継続していく実践知形成の基礎の時期に当たることを考慮すると、まずこの時期の様々な経験の様相を捉えることが必要だと考える。

そこで本研究では、保育士1年目に配属されることが多い3歳未満児クラスの新人保育士に着目することにする。子どもが個々に持つ生活経験や年齢・月齢の差を含む個人差に対応するために、保育所保育指針では子どもの人数による保育士の配置基準が示されており、特に人生の中で心身ともに最も成長・発達する低年齢（0～2歳）の子どもに対しては保育士の配置が厚くなっている。通常、保育現場ではこの低年齢の子どもたちのクラスのことを「3歳未満児クラス」と呼ぶ（3歳から小学校就学前までの子どもがいるクラスを「3歳以上児クラス」と呼ぶ）。3歳未満児クラスは

(平成25年10月23日受理)

川崎医療短期大学 医療保育科

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

複数担任制が敷かれており、その保育では基本的な生活習慣の確立が保育の目的の一つとなっており、3歳以上児クラスよりも個別的な対応が多いことが特徴である。そのため、3歳以上児クラスに所属する新人保育士とは切り離して考える必要があると考えた。

また、教育の現場では「教師（保育士）—生徒（子ども）」という関係の相互作用が展開されているため、両者の関係性に基づく関わり方は常に変化し続けているといえる。そのような教師（保育士）に焦点を当てたドナルド・ショーンは、教育実践の中で刻々と変化する状況に柔軟に対応しながら行為を行い、省察し、意味づけていく教師を反省的実践家（reflective practitioner）と呼んだ⁴⁾。反省的実践家は、直線的に成長するのではなく、教師としてのライフコースで大小の成功や失敗を重ねつつ、いわば、螺旋的に力量を形成していく⁵⁾とされる。保育士1年目がその螺旋の始点の位置にいると考えた場合、保育の対象である子ども、保育を協同していく保護者や同僚の保育士などとの関わりの中で経験する多くのつまづきや難しさを探索的に明らかにすることは、非常に意義深いと考えられる。

そこで、本研究では、3歳未満児クラスに所属する新人保育士が保育を行う上で感じる「保育の難しさ」に焦点を当てることとする。具体的には、「つまづきを感じたこと」「うまくできないと感じたこと」を新人保育士にインタビューし、その語りの質的分析を行うことを通して、新人保育士が感じる保育の難しさの様相を描き出すことを目的とする。

2. 研究方法

1) 調査対象

中国地方の認可保育所に勤務する新人保育士8名（いずれも2012年3月に保育士養成校を卒業し、2012年4月1日より勤務している保育士）で、いずれも3歳未満児クラスに所属する保育士である。各新人保育士のプロフィールは表1のとおりである。

2) 調査時期

2012年9月～12月の間に実施した。

3) 調査方法及び研究倫理に関する事項

調査の許可をいただいた新人保育士には、事前に「保育を行う上でつまづきを感じたことやうまくできないと感じたこと」をまとめておいてもらうように依頼した。なお、インタビューの聞き手は毎回筆者が担当し、インタビューの語り手である新人保育士は単独でインタビューを受ける場合もあれば、複数で受ける場合もあった。インタビューの中で語り手である新人保育者が言葉に詰まったり、解釈できない発言をしたりした場合は、適宜聞き手である筆者から言葉を足したり、話をまとめたり、もう一度説明を求めたりした。

インタビューの内容を記録するために、カセットレコーダーを使用することの了承を求めた。また、録音した内容は研究目的に使用しそれ以外のことには使用しないこと、インタビューを受けた新人保育士及び勤務先が特定されることはないことを説明し、全て本人の同意を得た上でインタビューを実施した。

4) 調査時間

インタビューの所要時間は55分～1時間30分であった。

表1 調査対象とした新人保育士のプロフィール

対象者*	クラス	子ども数	保育士数	備考
A	0歳児	17名	6名	育児担当制**
B				
C	0歳児	18名	7名	育児担当制
D	1歳児	10名	2名	
E	1歳児	17名	3名	育児担当制
F	1歳児	23名	4名	
G	2歳児	12名	2名	
H	2歳児	14名	2名	

※すべての対象者が育児経験を有していない。

※※年間を通じて保育士が担当する子どもを決め、生活支援を行う保育方法のこと。

5) 分析方法

佐藤⁶⁾を参考に、以下のような手順で分析を行った。

①録音したインタビュー内容を逐語録に起こし、文章化した。②逐語録を数度読み返しながら、句読点で句切られた意味のある文(節・句)の中で、「保育を行う上でつまずきやうまくできないと感じたこと」について述べられているものを抽出した。③その文(節・句)の意味内容をコード化し、付与した。④付与したコードを整理し、意味が同じものをまとめた。⑤最後に、精査したコードをさらに抽象度の高いカテゴリでまとめ、それらを概念カテゴリとした。

本研究では、インタビューを受けた8名の新人保育士が「3歳未満児クラスにおける保育の難しさ」をどのように感じ、考えているかを明らかにする。そのため、誰もが解釈可能な客観性や普遍性よりも、8名それぞれの新人保育士にとっての真实性や具体性が重要なものとなる。つまり、質的分析を行い明らかにされた本稿の研究結果は、必ずしも一般性があるものとは言えない可能性を有していることを十分考慮し、分析を行った。

なお、実践知研究の観点で考えると、何らかの保育場面や保育行為に限定することにより実践知を把握しようとするが、本研究では実践知研究の前段階として、新人保育士が保育を行う上でどのような難しさを感じているのか、その全般的な様相を把握することが目的であるため、保育場面や保育行為に限定せず、新人保

育士が感じる保育の難しさ全てを分析の対象とした。

3. 結果と考察

8名の新人保育士へのインタビューに基づく分析の結果、3歳未満児クラスにおいて新人保育士が感じる保育の難しさに関しては106コードが抽出され、大別して3つの概念カテゴリ(①子どもへの支援、②保護者への対応、③保育士間の連携)で捉えることができた。その一覧を表2に示す。以下、各概念カテゴリ内のコード別に結果の分析と考察を行っていく。なお、【 】内の文章は、新人保育士の語りの引用である。【 】内で解釈がはっきりしない言葉については、()で解説を付け足す。

1) 子どもへの支援

この概念カテゴリでは、「生活支援方法の幅のなさ」が47.5%と最も多く、「子どもの気持ちの理解(32.5%)」、「病気の判断と対応」「発達の遅れの見極め」がそれぞれ10.0%と続いた。

<生活支援方法の幅のなさ>

3歳未満児クラスにおける保育では、子どもの生活支援が主たる業務の一つとなる。この時期の生活支援の一つ一つの積み重ねが、将来の生活習慣の自立につながっていく。中でも、食事や睡眠、排泄といった基本的な生活習慣は私たちが人間らしく生きるための基礎となるべき生活習慣である。3歳未満児クラスの子どもはこうした基本的な生活習慣が自立していないため、

表2 概念カテゴリ、コード一覧

概念カテゴリ (全体に占める比率)	コード	文(節・句)数	概念カテゴリ内比率
子どもへの支援 (37.7%)	生活支援方法の幅のなさ	19	47.5%
	子どもの気持ちの理解	13	32.5%
	病気の判断と対応	4	10.0%
	発達の遅れの見極め	4	10.0%
保護者への対応 (20.8%)	保護者への声かけ	10	45.5%
	連絡帳でのやり取り	7	31.8%
	相談に対する回答	3	13.6%
	保護者への伝え方	2	9.1%
保育士間の連携 (41.5%)	保育観の違い	14	31.8%
	相談することへの遠慮	12	27.3%
	先輩保育士との違い	9	20.5%
	育児担当制での連携方法	5	11.3%
	補助する内容やタイミング	4	9.1%
合 計		106	

保育場面のいたるところで保育士が関わっていくことになる。

子どもの要求と保育士の関わりが上手くかみ合えば、そこに難しさは発生しないが、例えば【おもつ交換の際、交換台でベルトをしても、その中でひっくり返るんですよ。子どもの集中力が切れてしまって…】というようなことは、どのような経験年数の保育士が関わったとしても日常茶飯の出来事である。その際、新人保育士は子どもの気持ちの切り替え方法や子どもへの言葉かけ、関わり方のバリエーションが少なく、子どもの集中力を取り戻したり、維持させたりすることが難しくなるようである。また、なかなか寝かしつけることができない子どもに対して、【私の場合は、私の“どう対応したらよいか”という戸惑いとか子どもに伝わるんだと思うんですけど…】や【“私が何とかしなければ”という気持ちが強すぎて…】にあるように、関わり方の戸惑いや自信のなさ、余裕のなさが子どもに伝わってしまい、上手く関わるができなくなるということが明らかとなった。

<子どもの気持ちの理解>

3歳未満児クラスの子どものは、低年齢になればなるほど言葉を介した言語的コミュニケーションは難しく、お互いの意思疎通は表情を中心とした非言語的コミュニケーションにより行われる。その中でも、特に新人保育士が難しいと感じるのが、【泣いているんだけど、泣き続ける意味が分からない時があって…】に代表されるような、原因が特定できない場合の子どもの泣きをどう理解するかということである。保育士は子どもの泣いているときの気持ちの動きや周りの状況だけでなく、泣きに至るまでの文脈の推測、体調不良の可能性、子どもの特徴や家庭での様子などの幅広い視点からその泣きの原因に迫り、即時的に子どもに対応していく。このような様々な視点が新人保育士には蓄えられていないために難しさを感じ、【子どもが泣いたら、とりあえず抱っこしています】という単調な関わり方になってしまうと考えられる。

<病気の判断と対応>

保育所保育指針で「乳児は疾病への抵抗力が弱く、心身の機能の未熟さに伴う疾病の発生が多い」や3歳未満児は「特に感染症にかかりやすい時期である」と明示されている通り、保健的な環境作りと早期発見は保育士の責務となっている。保育士養成課程で子どもの保健については学習しているものの、子どものけがや病気、突発的な事故の対応については、実習で経験

することはほとんどなく、その多くが保育所に勤務してからの体験となる。例えば、【先日も担当の子どもが背中にバナーッとブツブツではなかったんですけど、赤い発疹ができていて、何なのかなと…】や【子どもの下痢なんかでも、実際に見たことがなかったから、どれが良くて悪くてというのがはっきり分からない】というように、理解しているはずの知識がその場でうまく実践に結び付けられないという難しさがあると考えられる。

<発達の遅れの見極め>

乳幼児期は個人差が大きな時期であるため、同じ年齢、月齢であっても、身体的な発育が異なることは少なくない。また近年、発達障害の早期発見・早期介入の傾向が高まっていることがあり、「発達が正常なのか、異常なのか、個人差の範囲なのか」といった子どもの見方が多くなされている現状がある。例えば、【先日1歳になった子どもなんですけど、ハイハイをしない子どもで、座らせるとずっと座って遊ぶか、仰向けかうつ伏せでずっと遊んでいる子どもなんです。それが大丈夫なのかどうなのかの見極めが難しい】という事例に対して、1歳になったばかり子どもの標準的な発達で考えるとハイハイは可能で、多くの子どもが歩き出す一歩手前の「一人立ち」ができるくらいの状態にあるはずである。「這う」という動作は7～8か月頃に獲得するものであるため、この子どもは標準的な発達時期より4か月経っても未だハイハイを獲得していないことになる。これを発達の遅れと見なすか、個人差と見なすか、そもそもどのくらいの時期が正常と異常の境目なのかは、子どもの定型発達の知識とともに保育経験に裏打ちされた見通しと確信がなければ見極めは難しいと言えよう。

2) 保護者への対応

この概念カテゴリは、「保護者への声かけ」が45.5%と最も比率が高く、「連絡帳でのやり取り」が31.8%と続いた。そして、「相談に対する回答」が13.6%、「保護者への伝え方」が9.1%であった。

<保護者への声かけ>

保護者との関わりも、保育士養成課程では理論知で留まっている分野である。実習における保護者との関わりは挨拶をする程度のものであり、本格的な関わりは保育現場に出てからとなる。その中で、新人保育士が最も多く戸惑っていたものは、【保護者とはなかなかしゃべれないですね】という語りに代表される“保護者にどう声かけしたらいいのか”、“忙しそうにしてい

るところにどのタイミングで関わっていったらいいのか”というものであった。また、【話しかけにくい保護者にはちょっと…澄ましているように見える保護者とか。どうしても保護者によって、話す量に差が出ちゃって…】といった発言もあり、新人保育士は保護者への声かけを予想以上に難しいと感じていることが明らかとなった。また、保育所保育指針に明示されている保護者支援や保護者と子育てを協同する方法を探るといった段階には程遠い実情が浮き彫りとなった。

<連絡帳でのやり取り>

3歳未満児クラスの中でも特に0歳児クラスや1歳児クラスにおいては、一日の保育所での生活を記録し、毎日の連絡帳を通して保護者とやり取りをする保育所がほとんどである。これに関しても、保育士養成課程の中で十分な指導が行き届いていないのが現状である。新人保育士は【今日は何を書こうか】や【連絡帳に書く内容も日々変わり映えしない時にどうしようかと迷う時があります。参考に前の前の日の連絡帳を見ると、同じようなことが書いてあって…】というものから、【口頭で言うときは表情があるのでいいんですが、書き言葉はどう取られるのかと考えると…】というものまで幅広い悩みが語られた。前者は子どものクラスでの様子を十分に観察することができていないことが原因であり、後者は文章による表現力不足に起因するものであると考えられる。

<相談に対する回答>

保護者から保育士に向けられる話の内容としては、挨拶や世間話からわが子の発達相談に至るまで、多種多様なものが想定されるが、今回の新人保育士のインタビューでは【トイレトレーニングについて、他園を経験している保護者で「前の園では〇〇のようにしていましたが、この園ではどうしていますか」と質問され、その場で答えられず…。園の保育方針を理解できていなかったの…】や【“グレーかな（発達に遅れがあるかもしれない）…”】とと思っている子どもの親からいろいろ相談される。（中略）「園ではこうしています」と答えています。でも、園でしてることも正しいかどうか分からないのに…】など、生活習慣の獲得や発達相談に関する対応についての語りがあった。これらの相談には、何らかの答えを求めている保護者の思いが込められている。しかし、「保護者への声かけ」コードにもあったとおり、多くの新人保育士はまだ保護者からの相談に的確に答えるような段階に達してはおらず、中にはこれらに正確に答えなければならないとプ

レッシャーを過度に感じてしまうことや、応えることができない自分に自信を無くしたり、しいては無力感を感じてしまったりすることが明らかとなった。

<保護者への伝え方>

このコードでは、保護者との適切な距離感を保ちながら、自らが保護者に聞きたい内容をどのようにして伝えるべきか、模索している新人保育士の姿が見られた。【子どもの直してほしいところがあっても、それをストレートに伝えたら問題かな…とか考えてしまいます】や【さりげなく家での様子を探る聞き方…私には難しい】、【その子の課題とか伝えたいことがあっても、直前になって尻込みしてしまって…その子の良いところしか伝えられないもどかしさがあり…】といった語りにあるように、新人保育士は考えていることや保護者への提案を思ったままに言葉にすることの危うさを認識しているのだと考えられる。その上で、次の一歩をどう踏み出すべきかに悩みを感じていると思われる。

3) 保育士間の連携

この概念カテゴリで最も比率が高かったのは、「保育観の違い（31.8%）」であった。次に「相談することへの遠慮」が27.3%、「先輩保育士との違い」が20.5%、「育児担当制での連携方法」が11.3%、最後に「補助する内容やタイミング」が9.1%と続いた。

<保育観の違い>

3歳未満児クラスは複数担任であることがほとんどなので、他の保育士と考えや足並みを揃えながら協同して保育を展開していかなければならない。複数担任制は、新人保育士にとっては身近にいる保育士をモデルとすることができるため、多くのことを見て学びながら自らの保育に活かすことができるというメリットがある。しかし、【もう一人の先生と考え方が合わない。自分はこうしたいというのがあるのに、「指導を合わせて」と言われ…。その先生は厳しめの指導を行うので。私が主（主担当としてクラス全体を取り仕切る役割）の時も、相手の先生はベテランだから自分のやり方を変えないので、私もそちらに合わせてしまうのか…】にあるように、ペアとなる保育士の主張が強く、それが自らの方針と異なるときには、保育士間の関係性が悪循環に陥ってしまう危険性がある。新人保育士は新人保育士なりに自らの保育観や子ども観を持ってはいるものの、主張の強い保育士や経験年数が多い保育士に対して、それらをどのように伝え、どう理解を引き出していくのかに関するコミュニケーショ

ンスキルの学習途上にあることが明らかとなった。

<相談することへの遠慮>

新人保育士にとって勤務した保育所は初めての職場であり、初めての同僚（園長や主任、同じクラスを担当する先輩保育士）の中で一から関係を作っていかなければならない場所でもある。その中で、「保育観の違い」コードにあった他の保育士とうまく関係を作ることができなかった場合、保育に関する疑問が生じたときに【一緒に組んでいる先生や苦手な先生にはどうしても萎縮してしまう】ため、その場で聞くことができない現状や、【何でも聞いていいと言う割には、結構あっさり流されちゃったり、あまり真剣に伝えてくれなかったりとかで…】というようなくまかみ合わない現状が発生してしまうことが分かった。こうした成功体験ではない経験の積み重ねが、“こんなこと聞いていいのかな…”といった相談することへの遠慮につながっていると考えられる。

<先輩保育士との違い>

このコードでは、【前にも原因が分からず泣いている子どもがいて、もう一人の先生がとっさの判断で検温したら38度の熱があって…そういうのはすごいなど、子どものちょっとした変化で気づく。朝と昼の違い、寝て起きての違いとか】や【泣いて登園してきた子どもが泣き止まなくて保育室に入らなくて（中略）、ベテランの先生は落ち着いて対応されていて、子どもを受け取って、そして一日が終わってお迎えに来られた時に「泣いとしても、落ち着いたら納得して元気に遊んでいたから大丈夫ですよ」と、保護者にフォローができていて…すごいなど】といった語りが多く見られた。これらの語りには、先輩保育士の保育方法や子どもとの信頼関係の強さに憧れを持ちつつも、“今の自分には先輩保育士のように上手く出来ない…”という謙虚な自己分析の結果が反映されていると考えることができる。

<育児担当制での連携方法>

育児担当制とは、年間を通じて、決まった一人の保育士が乳児の生活支援を行う保育方法である。【みんなで0歳児クラスを協力して保育している、という私の勝手な思い込み…（中略）いきなり初対面の3人の子どもを主担当として任されるんですから…。え？この3人だけ見ていればいいの？みたいな…】といった率直な感想は、育児担当制を初めて経験する新人保育士なら当然持つことであろう。また、【食事の場面で、自分から食べるができるようになってほしい、とい

う思いから、少しずつ少しずつ食事介助の機会を減らしていったのに、私が3日間休んで、その間に担当してくれた他の保育士がホイホイと子どもたちの口に食事を運んでいたそうで…。3日間の休みから復帰したら、あれれ…ということ（食事の際、自分で食べようとせず口に運んでくれるのを待っている子どもの姿）になっていて…】という語りからは、担当する子どもの特徴や癖、発達過程などを常時他の保育士と共有しておかなければならないが、実際には難しいという点に戸惑いを感じている姿が見られた。

<補助する内容やタイミング>

複数担任制の保育では子どもたちの生活や遊びが充実し、よりよく展開されていくために、保育士間のチームワークが必要となる。また、3歳未満児クラスが育児担当制を導入していない保育所であれば、複数いる保育士の役割を主担当（子どもの前に立ち、遊びの内容や生活流れ全体をコントロールする役割）と副担当（主担当の補佐を行う役割）に分けて保育を展開していく。そういった役割の中で、【視野が狭いので、ここで動く、ここに入るというタイミングが難しい。遊びの場面でも食事の場面でも…】や【保育士間のアイコンタクトが難しい】といった保育士間の連携を手探りしている新人保育士の姿が明らかとなった。

4. 総合考察

3歳未満児クラスの新人保育士のインタビューから分類された3つの概念カテゴリを概観すると、新人保育士が感じる保育の難しさの主たる内容は、コミュニケーション能力に帰結するものが多いことが明らかとなった。その上で、もっとも比率の高かった概念カテゴリは「保育士間の連携」であった。保育は子どもの成長・発達が主たる目的となるため、「保育士—子ども」間の関わりが重要なことは言うまでもないが、今回の研究対象となった新人保育士は、子どもとの関わり以上に同僚となる保育士との関係に難しさを抱えていることが明らかとなった。これは「保育観の違い」や「相談することへの遠慮」のそれぞれのコードで語られたような対人関係を築く力、相手とコミュニケーションを行う力に関連があると考えられる。真下ら⁷⁾らの保育士養成校1年生を対象にした調査では、学生自身に人とのコミュニケーションに関する苦手意識があること、特に初対面の人との会話に代表されるような「他人との最初の関係づくり」やトラブルの解決などの「能動的な働きかけ」が苦手であることが明らか

にされており、本研究と一致する部分が多い。

一方で、最も比率の低かった「保護者への対応」の概念カテゴリについて、日常的に保護者の対応は行うものの、保護者からの相談に受け答えをする業務に関しては、経験の少ない新人保育士ではなく他の保育士が対応していることが現実として多いため、新人保育士の悩みとしては他の概念カテゴリと比較して相対的に比率が低くなったと考えられる。これが一人担任であることが多い3歳以上児クラスの保育士であれば、必然的に新人保育士であっても保護者対応を行うことになるため、比率は高くなると思われる。3歳以上児クラスの保育士の保育の難しさについても調査し、本研究との比較を行っていくことは今後の課題としたい。

次に、各コードに着目すると、「生活支援方法の幅のなさ」や「保護者への声かけ」、「相談することへの遠慮」などのコードは、子ども（保護者や他の保育士）との信頼関係の形成により、比較的短期間に難しさが和らいでいくと推測される。一方で、「子どもの気持ちの理解」や「相談に対する回答」、「ベテラン保育士との違い」などのコードは、一定の時間をかけた知識と実践の積み上げが難しさの解消に必要であると推察される。今回の研究では、1年間の内、9月から12月の間に、各新人保育士に一度だけ実施したインタビューを分析対象としているため、どのような過程を経て新人保育士が感じる保育の難しさの変容していくのかを検証することはできない。したがって、新人保育士の1年間をいくつかに分け、その時期ごとに感じる保育の難しさを明らかにし、時期ごとの保育の難しさの変容を解明していくことで、より具体的な新人保育士が

感じる保育の難しさの様相を描き出すことが可能だと考える。

5. 謝 辞

お忙しい中、時間を割いていただき、快くインタビュー調査にご協力いただいた新人保育士の皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

6. 付 記

本研究は、第66回日本保育学会のポスター発表で受けた指導、助言をもとに、加筆、修正したものである。

7. 文 献

- 1) 厚生労働省：保育所保育指針，2008.
- 2) 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・安見克夫：保育者の語りに見る実践知—「片付け場面」の映像に対する語りの内容分析—，保育学研究47(2)：70—81，2009.
- 3) 香曾我部琢：小規模地方自治体における保育者の成長プロセス—保育実践コミュニティの形成のプロセスに着目して—，東北大学大学院教育学研究科研究年報60(2)：125—152，2012.
- 4) ドナルド・ショーン：専門家の知恵，佐藤 学，秋田喜代美訳，東京：ゆみる出版，2001.
- 5) 松崎正治：初任期から中堅期へ移行する時期の教師の力量形成の研究，全国大学国語教育学会発表要旨集121：295—298，2001.
- 6) 佐藤郁哉：質的データ分析法，東京：新曜社，2008.
- 7) 真下知子，張貞京，中村博幸：保育者—保護者間のコミュニケーションの改善を目指した研究—保育者に必要な能力・資質に関する幼児教育学科学生の意識—，京都文教短期大学研究紀要49：116—128，2011.

